

訂補
新體國語教本

375.9
Fu10
資料室



42065

教科書文庫

4
810
41-1912
200030 2356

mag. 72
1912

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

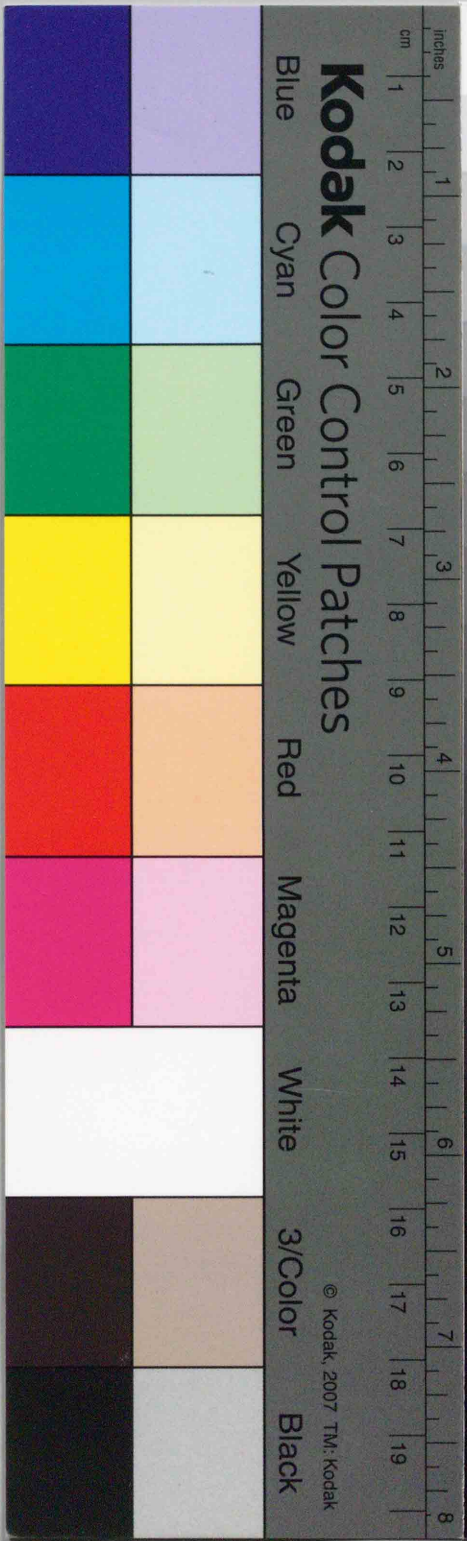


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Fu10

文部省檢定
明治四十五年二月十七日
中學國語教科用

文學博士 藤岡作太郎編纂
京都帝國大學
文部大學教授 藤井乙男補訂



補訂
新體國語教本

東京 開成館藏版

凡例

- 一 本書に載せたる古今の作家の文、すべて教科に適應せしめんが爲に變更を試みたる所あり。特に改竄の多きもの、又大意を摘みたるものなどは、(何々による)と記せり。
- 一 上欄には、教授上の便宜の爲に、假名遣、熟語、慣用句、文法、及び修辭法を示すに足るべき語句を摘出せり。同じものを繰返して挙げたることあるは、習熟の要ありと思へばなり。時間の都合にて適宜取捨すべし。
- 一 上欄に摘出したる語句の下に、小さく記せるは、類字、類語等、相並べて學ぶに便なるものを挙げたるなり。單に小さく記せるは、同じ文のうちに用例あるものにして、これなきは

凡例

括弧にて圍みたり。例之ば互。渡とあれば、互。は直下の本文にあるもの、渡も同じ文のうちに見ゆべし。互。渡とあれば、この渡はその文の中にはなきなり。

卷一 目次

一	中學校	一
二	二十四のとし	五
三	毛利元就	六
四	田舎より	一〇
五	潮干	一三
六	端艇競漕會	一七
七	鯨とり	二三
八	コロンブス その一	二七

九	コロンブス <small>その二</small>	三
一〇	楯の半面	三
一一	かんにん	三
一二	廉潔ト節儉	四〇
一三	立てる農夫と坐れる紳士	四
一四	機智	四
一五	俠夫	五
一六	海舟の苦學	五
一七	フアラデー	五
一八	戦前の一曲	六

一九	小早川隆景	六七
二〇	歸省	七〇
二一	螢	七五
二二	富士登山 <small>その一</small>	七九
二三	富士登山 <small>その二</small>	八五
二四	長良川の鶺鴒	九〇
二五	京城	九五
二六	食物	一〇一
二七	石田三成	一〇四
二八	忘れられぬ父の訓誡	一〇七

二九	恩を忘れず	一一
三〇	酒井金三郎	一四
三一	蚯蚓	一七
三二	少壯時代の二傑 <small>その一</small>	二〇
三三	少壯時代の二傑 <small>その二</small>	二四
三四	少壯時代の二傑 <small>その三</small>	二六
三五	名判官	三三
三六	曉星園	三四



補訂 新體國語教本卷一

一 中學校

吾等は今中學校の生徒となれり。

立派
聳え。

立派なる校舎を見よ。ゆたかに六百人を容るべき講堂眞中に高く聳え、幾棟かの教室その傍に並べり。吾等は未だ詳に全校の様子を知らざれども、珍しき物理、化學の機械、面白き動植物の標本、美しき圖畫の作品、歴史、地理に關する参考品など、いづれもそれごとく

の特別教室に陳ねられたり。そのほか、廣き運動場に
ある木馬、梁木、テニスコートまでも、從來の小學校と
は大いに異なる所あり。

この間までは小學校の上級生として誇り居たりし
吾等も、今中學校に来て見れば、生徒は皆體格すぐれ、
元氣盛んにして、到底その傍へも近づきがたきこゝ
ちす。吾等は小學校にては優等生の中にして、多くの
入學志願者の中より選抜せられて本校に入り、心中
甚だ得意なりしに、こゝには吾等より遙にまさりた
るものゝかほどもあるやうに思はる。その間に立ち

到底

得意

をこ

て優等の譽を保ち行かんには、以前に増して幾倍も
勉強せざるべからず。

指導

小學校にては、すべて先生の指導を受けて、その教の
まゝに従ひしが、今よりはこれまでの如く先生をの
み煩はさずして、自ら勉強自ら修めんと心がけざる
べからず。年齢の加ると共に、次第に人に頼らずして、
獨立自營する風を養ふべきなり。本校の上級生とて
も、もとは吾等と等しく幼かりしが、多年の勉強によ
りて今の如く進みしなり。吾等も學びて怠らざれば、遠
からずして彼等の位置に進むべし、否、彼等を超えて

獨立自營

位置
超えて

階級

得ん
得べし

進まんことも、決して難からざるべし。
小學校に比ぶれば中學校も高く見ゆれども、その上
にはなほ數多の學校あり。吾等が中學生となりしは、
たゞ進歩の一階級を上りしだけなれば、この階級を
基として、なほ高等なる學校に入り、又は世の中に出
でて働かざるべからず。古來の偉人英雄ももとは吾
等と等しき青年なりしが、刻苦勉勵して、遂に能く大
業を成したるなり。吾等も不撓の精神を以て進まば、
彼等と同じく不朽の名を得んことも難きにあらず、
否、彼等にも増したる大業を成すことを得べし。

(五二)

二 十四のとし

元和元年は二二
七五年

紀伊大納言頼宣は徳川家康の子なり。元和元年夏、大
阪の二度めの役の時、先陣いくさはじまれりと聞き、
もみにもんで馳せ來りたれども、事既に終りてあり
しかば、父の陣に至り、頼宣先陣を承らざりし故に、今
日の戦に會はず、かへすぐも口惜しく候。といひて、
涙を流す。松平正綱傍にありて、殿はなほ御年も若く
候へば、かゝる事には幾度もあひたまふべし。さのみ
うらみたまふべからず。と申ししに、頼宣以ての外に

さのみ

いひて

氣色
逢ふ
うれしげ

いふ。
ふるひけり

氣色を損じて、やあ、正綱、頼宣が十四歳に逢ふことは再びあるべきか。」と詰る。家康この言をきゝて、いとうれしげにて、今日、頼宣が如何なる軍したらんより、只今の一言こそ高名なれ。」と賞めければ、その座にありし人々、虎の子は地に落つれば牛を食ふ氣ありといふことあり、おそろしの御心やと、みな舌をふるひけり。

(新井白石)

三 毛利元就

毛利元就は戦國の世の名將なり。はじめ大内氏に仕

互、渡

たまはん
いへば

たまひて
たまふべし

へしが、その主義隆が陶晴賢に弑せらるゝに及びて、晴賢を討ち、又尼子氏を滅し、その領地山陽、山陰、西海に互りて、勢海内に振ひたり。

元就、十二歳の時、嚴島の祠に詣でたりしが、歸りて、その従者に、今日何を祈りしぞと問ふ。その一人、われらは只殿の中國を皆得たまはん事を祈り候ふ。」といへば、元就聞いて、小き事を祈りしゝるな、何故四海を悉くとは申さざりしか。」と咎む。その人、まづこの邊を平げたまひて、しかる後四海をも心がけたまふべし。」と答へしに、元就押返して、四海を得んと思はば、やうく

弘治元年は二二
一五年

中國を得べし、中國を得んと思ひて、何として中國を取るべきか。といへりとぞ。

弘治元年十一月一日、元就風雨に乗じて陶晴賢を嚴



毛利元就

島に襲ひ、奮闘してこれを滅せり。この役に先だちて、晴賢も元就も共に使を伊豫の河野氏に遣して、船を借らんとす。

たまへ。
渡、互

晴賢は何となく借り受けたしといへるばかりなり。元就の口上には、只一日貸したまへ、宮島に渡りて直に返すべし。とあり。河野の臣來島通康これを聞きて、一言なれども、思ひ定めたるところあり、毛利必ず勝つべしとて、三百艘の船を貸したり。

俗説にいふ、元就諸子を集め、數本の箭を取寄せて示して曰く、この箭を見よ、一本づつ折れば、折り易けれども、一つに束ぬれば極めて折り難し、汝等これを手本として一致協同せよ、慎みてわが言に背く勿れ。と誠めたりとぞ。

一致協同

起居

候ひしが

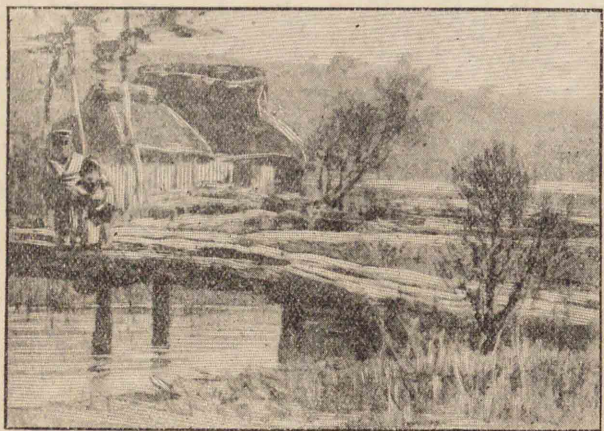
候へば

添へて

四 田舎より

拜啓その後御起居如何に候や昨秋一家舉つてこの地に移り候ひてより往來する友もなく日々一里の道と學校に通ふのみにて候ひしがこの頃は學校は休に相成り又春の景色におのづから心もうき立ち候へば日々弟妹と共に田野の間と歩き廻り例の水彩畫をも試み候そのうち最近のよあ一枚とて説明をも添へて御送り申上げ候

うるはしき



小川のわきに高き松の聳えたるその下の葉屋が僕等の住居に御座候土橋の上に立ちたるは弟と妹とに候川の堤に様々の色うるはしきは若草の中に堇花浦公英蓮華草などの咲き乱れたるにその中には土筆も多々妹などは時々前垂のうち一杯にして歸り候堤のあな

畫

たた緑の色こまきは麥畠にてまだ穂は出
 でず菜の花は咲きて舞ひ居る蝶を招
 き居り候
 すわし見れば野も山も一面に火鉢の上に火
 氣の昇るが如くちらくと動き候れば陽
 尖とつよ由畫にはかけ申さず候雲雀も
 畫中には入らず青天に一點の塵と見ゆる
 ほど小さく聲ばかり大きくなるがやがてふつと
 啼き止みて逆落しに麥畠のうちん落ち候
 山陰の藪には今も鶯の轉り居り候この

消息

近況

金澤は横濱の南
 におり
 かへり
 直徑

邊にけるは夏の頃までもかやうに啼き續
 くる由に御座候
 この度はこれにて筆を止め候都の友の消息
 もゆかしく上野日比谷の春色も思ひやられ候
 御近況御知らせ被下度奉待候由々

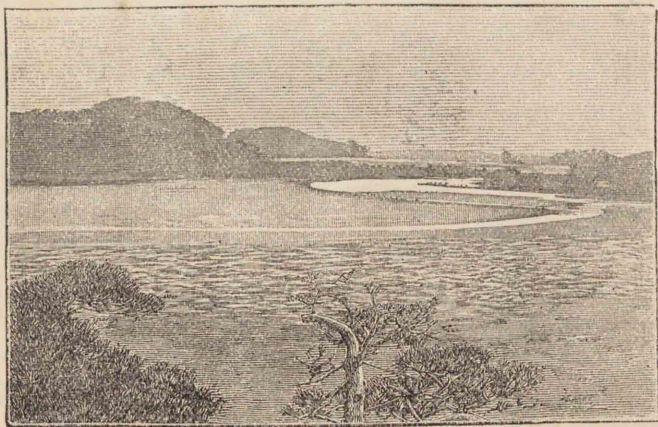
五 潮干

金澤の牡丹見に行きて、そのかへりに野島に遊べる
 に、此處より夏島まで直徑半里ばかりの沙濱は、貝掘
 る人にて満されぬ。皆このあたりの者にて、右の手に

拾ひ行く

庖丁の如きものを持ちて沙を鋤き返し、左の手にて掘り出したる貝を拾ひ行く。或は一尺あまりの竹箸

周囲
さながら
帯



野

島

のさきにブリキの鋒つけたるを、沙の中の小穴につきさして、馬刀貝うまぼりを引き上ぐるもあり。まゝ蟹、蝦などの沙にもぐれるも捕へらる。見渡せば、沙濱は恰も一大盤をなし、その周囲には、碧海さながら帯の如く盤を繞り、碧

帯

越え。

つかへぬ

長閑

をさめて

色の遠山また絲の如く海を限る。盤上は薄紫の沙にして、處々の溜り浅うして踵を没せず。小蟹走り、小鯊遊び、何處にもびちくといふ音す。蟹の言ふにや、鯊の囁くにや。貝掘る人は蟻の散れるが如く、或者は歌ひ、或者は黙し、遠きは呼び、近きは語り、時々立ちて腰を伸す者あれば、その頭は沙濱を越え、帯の如き海を越えて、白雲ゆく空につかへぬ。

長閑なるかな。海遠うして細く、山遠うして碧し。數百の老幼おのゝく沙を掘りては貝ををさめて、いそいそとしていそしみ、山の影は靜かに沙上の溜りに臥

す。見るものすべてのだかに春光の中にあり。
 已にして潮次第に満ちんとするにや、或はふごを荷
 ひ、或は熊手を肩にし、箆を背負ひ、手桶を提げて、歸る
 者相續ぐ。後れて來れる者は踏みとまりて、なほ貝を
 拾へり。やがて海は沙濱の四方より包圍攻撃を始め、
 帯の如くなりし海は、四方より一分づつ廣まりて、沙
 の上に掘り居し者は潮先に足をあらはれ、次第に一
 人づつ陸へくと驅りやられて、沙退き、人退き、潮進
 み、海進みて、薄紫の濱は見るくちままり、一時間ば
 かりして見れば、沙は痕なく、海はわが足下まで青く
 拾へり
 あらはれ

所えがほ。

湛ひ、白帆は所えがほに浮べり。

(徳宮蘆花)

隅田堤は東京市
 の東部を流るゝ
 隅田川の東岸の
 堤

六 端艇競漕會

やうやく人垣おし分けておち着きしは、隅田堤の櫻
 の下をとろくと下りたる芝生の上なり。
 見渡せば、花曇といふものにや、空どんよりとして、向
 うに見ゆる待乳山の森も薄絹に蔽はれたるやうな
 り。うち霞みたる河面を彩れるは、赤白緑の幾百千本
 の旗なり。旗は人の手にあり、人は船に乗りたり、船の
 數また幾十百艘、これぞ聲援隊とまづ領かる。

蔽はれたる

聲援隊
まづ

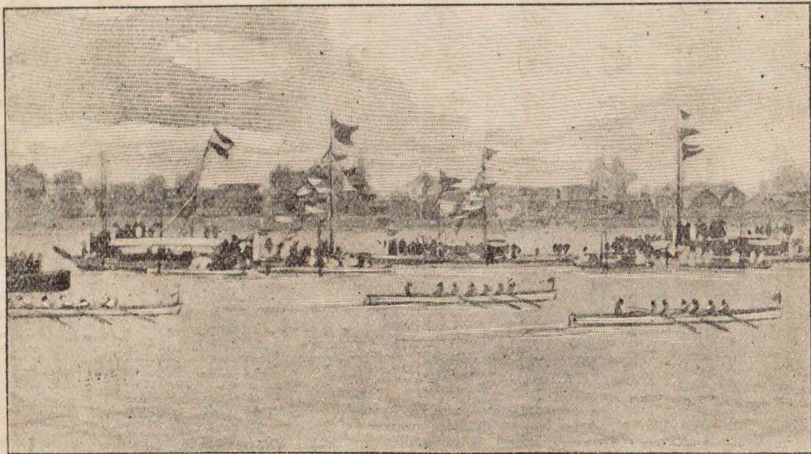
競漕
しづしづと
選手
出発點
しづめて
覺えたる

あゝ今日は名高き帝國大學のボートレースの日なり、われもまたこれを見んとて後れ馳に來れるに、時既に移りて、最後の分科競漕のみ残り。やがて上流の艇庫の方より小蒸氣船に引かれてしづしづと流を下る三隻のボートあり。選手は今ほがらかなる樂の音に送られて、出発點をさして引かるなり。川も堤も一時に鳴りをしづめて、顔といふ顔眼といふ眼、悉くこれに向ひ、これに注ぐ。六の場の様、これを快といはんか、おれを壯と呼ばんか。われはふと歴史にて覺えたる屋島のいくさを思

（二）

かくや
徽章

關原の役は石田三成等と徳川家康とが天下わけめのいくさ
破、敗



ひ出せり、源平兩軍が手なみいかにと見まもる中を、波間遙に馬乗り進めし那須與一の姿もかくや。かく思へる時、傍なる柏の徽章つけたる一人の學生は、雙の拳を固めて、「關原！」と力ある聲に叫べり。一發の銃聲空を破つて響く、船はゆるぎそめぬ、旗は色めき出でぬ、もとより人はとよ

堤なるは

めき立ちぬ。「赤、赤」といふ聲、「白、白」といふ聲、「青、青」といふ聲、堤なるは足踏みならし、船なるは舷敲いて、聲を限にをめき叫ぶ。

見よ、今や勇士は近づきぬ、漕手がオールの一上一下はさながら手に取る如し。宇治川の先陣は誰ぞ、佐々木か、梶原か。緑の整調のたくまじき身振よ、ハンケチ振り出でし舵手は白ならずや、すは赤まづへピーをかけたりと覺ゆ。いづれも負けず、劣らず、矢の如く、電の如し。決勝點は迫れり、白ぬるか、緑ぬるか、否、赤早し、勝敗は今一瞬。

源義経が源義仲を攻めし時、佐佐木高綱と梶原景季とが先陣を争ひし故事

整調
舵手

覺ゆ。
いづれ

審判官

敗、破

遺憾

聞えし
優勝旗

た、すみ

面

忽ち天に轟く人の叫、ちぎれ飛ばんとする旗のひらめきの中に、つと審判官の船にたてられしは血の如き赤の旗なり。また更に起る人の叫、旗のひらめき！「勝は赤の手に歸したり、均しく半艇身の差を以て敗れたる二隻の遺憾はいくばくぞ。艇庫の方に二たび三たび萬歳の聲の聞えしは、名譽ある優勝旗の勝利者に授けられたるなるべし。われを忘れてひとりた、すみたるうち、いつしか川の船も陸の人も散りて、あたり淋しくなりぬ。水の面も薄暗きに、いざとて堤に上れば、白う暮れ残る櫻の

今始めて目につきたり。

七 鯨とり

冒険

午後三時二十分、とゞめの銚を撃つた。當つた。當つたけれど鯨は死なぬ。そこでいよく捕鯨事業中の大冒険たる端艇進撃は令せられた。

勇敢

左舷に吊つてある二間未滿の小端艇は忽ちにして下された。この端艇は二人して二艇宛の櫂で漕ぐのである。舵取は居らず、進むも、退くも、右へも、左へも、皆二人の櫂で行ふのである。その勇敢な乗組はと見る

見える

鬼上官は加藤清正
見るやう。

と、二人の水夫と船長とである。船長は槍の如く見える四間あまりの銚を持って、端艇の艦に突つ立つて居る。その昔、征韓の役に、船頭に槍を杖づいて立つた鬼上官の堂々たる姿を洋式で見るやうである。余はむやみに帽を振つて、萬歳を叫んだ。

ニコライ丸はこの時の捕鯨本船
(二〇)噸、乗組十六人、速力八漣

三人の突撃者は、血と潮とを噴き上げる下に、無二無三に進み入つた。血煙は日光に反射して火山の焰に異ならぬ。忽ちにして端艇は熔岩流とも見るべき巨鯨の胴中に取り揚げて、船體は一本立となり、人は皆逆さまになつた。ニコライ丸から見て居る者は、皆冷

沈着
 掛けよう
 突撃
 くらゐ
 觸れう
 (觸れよう)
 微塵
 不具者

汗をかいた。いつも沈着な砲手までが、この時ばかりは救命浮標に手を掛けようとして居る。まことにこの端艇突撃ぐらゐ危険な事業はない。若し鯨の尾羽が手平かに觸れうものなら、船體はすぐ微塵に碎けてしまひ、乗組は無論撥ね飛ばされて、助かつた所で一生の不具者となるのである。鼠一匹でさへ窮した時には近寄れぬのを、これは巨鯨の死物狂、大變な事になつて來たと、余は船橋で慄へずには居られなかつた。

唯見る、艦の船長、力と頼む一本の銚をしごいて、鯨の

落ちたやう

權

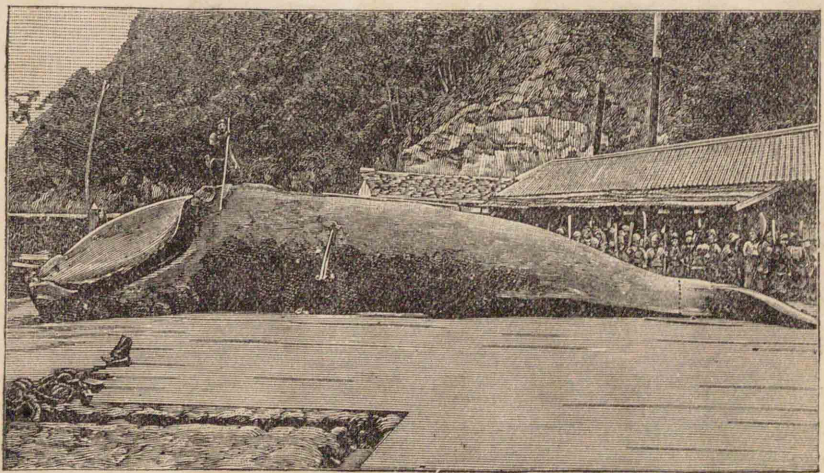
一所懸命

心臓部目がけて突つ込んだ。同時に、鯨の體は海中に沈み入つて、絶大な血の渦卷！

端艇は山の頂から谷底に落ちたやうに吸ひ込まれた。二人の水夫は必死となつて權を動かしたが、船長はまた銚を放さぬ。筏師が竿を泥川に突き立てたやうな形で、一所懸命に力を入れて居つたが、急にそまを引抜くや否や、それとばかり、五六間、後退を命じた。引くか引かぬ間に鯨はまた浮き上つた。それと見ると、奮然、端艇を再び乗り揚げて突く。沈む、退く、浮く、突く、これが四回ばかり繰返されたので、六尺餘の銚の

穂先は弓のやうに曲つてしまつた。

豫て用意の鐵槌で、退いては打ち直し、曲ればまた打ち返して突く。遂に船長はえい面倒なといふ風で、曲つた穂先を舷側に打ちつけて反を返し、今しも浮き上つた鯨の手平の下を深く突き刺したので、さしも



面倒

穂先

絶命

唱へられた

測つて

教へた

の大動物も全く絶命、兩方の手平を高く立て、雪の如き眞白の腹を出して、碧海に一の字となつた。

「萬歳！」は始めて船員の口に唱へられた、時に三時四十一分。それからその鯨をウチンチで引き寄せて、右舷側に鐵鎖で結び付けた。尾を先にして頭を後にしたが、大方ニコライ丸の八九分まであつた。身長を測つて見ると六十一尺、胴の周圍の最廣部が二十四尺。長須鯨の雄であると船長は教へた。

(捕鯨船)

八 コロンブス その一

遂に
確信
遂げん
願ひいで
願はん
旅費
耐へ忍ぶ
拜謁

コロンブスは、西の方へ船を進めゆかば、遂には印度に達すべしと確信したれば、その志を遂げんために、まづイタリヤのゼノア國に願ひいでたるが、聽き届けられず。次にポルトガル王に願ひたれども、これまた思ふやうにならず。この上はスペイン王に願はんと思ひ立ちし頃は、もはや旅費は盡き果て、妻には死に別れ、悲しき事、つらき事のみ重りけれど、よくそれを耐へ忍び、野宿をもし、乞食をもし、やうやくスペインに着きぬ。かくて王に拜謁し、願の旨を申し試みけるが、王は、いづれ學者等に調べさせたる上にて。」と

答へ。
質問
答辯
首尾よく
合點
計畫
叶ひがたし
流石

答へ、やがて國內の大學者を召し集め、その前にコロンブスを呼び出し、種々の質問をなさしむることとしけり。コロンブスは、一々熱心に明瞭に答辯して、首尾よく難問を切り抜け、やうやく學者に合點せさせ、まづよしと思ふ間もなく、ふと國內に戦争始り、折角聽き届けられんとせし事も中止となりぬ。かくて三年程経たりし時、突然政府より、其方の計畫は空論にて、とても實行の望なければ、採用叶ひがたし。」と言ひ渡されければ、流石のコロンブスも大きに失望し、力なくもスペインの都を離れ、一時は或寺院

剛毅
叶はす

準備
整ふ

に身をひそめて獨り悲に沈みたり。
されども元來剛毅なるコロンブスなれば、更に勇氣
を奮ひ起し、再び王及び王妃に歎願し、もし今度も叶



はむば、イギリス、フランス
へも渡りゆき、斃れて後已
まんのみと、心中に思ひ定
めけるうち、やうやく王の
許可下まり。

かくて西曆一四九二年八月、大船の準備も整ひされ
ば、コロンブスはいよく、果知らぬ船路に立出でぬ。

失ひ。
修復
碇泊

夥しく

見え。

かひ。

大船とはいへ、今日の帆前船にも劣る粗末なる船な
れば、出帆後まだ三日もたぬうちに、一隻の船は舵
を失ひ、修復のため凡そ一箇月も或島に碇泊するこ
ととなりしが、その間に一夜テネリフと云ふ火山烈
しく噴火して、夥しく石片を降らしたれば、水夫等怖
氣づき、神の怒なるべしとて、船を出しかねたり。それ
をやうくに説得し、また船を進めたるが、翌月にな
りて磁石に甚だしき狂生じぬ。水夫等驚き怖れ、もは
や西へは行きがたしと騒ぐうち、數羽の鳥見えたれ
ば、多分陸に近づけるならんと、勢づきしかひもなく、

間違

つゞけぬ

それも間違と分りて、落膽し、立腹し、コロンブスを狂人なりと罵りて騒ぎ立つを、いろくくに諭しなだめて、再び進行をつゞけぬ。

九 コロンブス その二

出帆

かくて出帆後六十日あまりとなりたれど、見るかぎり茫々たる大洋にて、何の見込も手がかりもつかざれば、水夫等はコロンブスに欺かれたりとして怨み怒り、この上進まんとせば、コロンブスを海に投げ入れて漕ぎ戻るべしと、罵りあへり。今はコロンブスもせ

水の泡となり

飢ゑて

肝腎

残念

立ちつ居つ

ん方なく、なほ三日たちても陸見えずば、漕ぎ戻るべし、三日の間だけ待ちくれよと、頼みぬ。

あゝ、長き年月の辛苦も水の泡となりたるか、中途にして歸ること、うらめしともくちをしとも言はん方なし。よし飢ゑて死なんまでも、船を進めて見たけれども、肝腎の水夫等が言ふことを聽かぬを何とせん。われ今空しく殺されなば、わが志を誰か繼ぐべき。さてさて残念なることかな。三日のうちに陸見えずば、何とせん、あゝ、何とすべき。かく思ひて、コロンブスは立ちつ居つ氣をもみけるうち、一日とたち、二日と過

みたり

航海 絶えず

ぎて、げふははや三日となりぬ。
コロンブスは甲板に立ちつゝけて向うの方を見つ
めぬたり。時に十月十二日の眞夜中すぎ、檣の上にて
見張をなし居たる水夫は、「陸よ〜」と叫びぬ。一つの
島の見えたるなり。

コロンブスの喜思ひやるべし。

この時見つけし島は、サンサルバドルと名づけられ、
アメリカ新大陸発見の手はじめとなりぬ。

コロンブスは、これより十年の間、絶えず同じ事業に
力を盡し、なほ四たびほど西方へ航海せり。その間、或

疑はれ

變へず

挫く

大抵 撓む 成就



陸上のスパンコロ

は大あらしに苦しみしこ
ともあり、或は讒言にあひ
てスペイン王に疑はれ、獄
に入れられしこともあり
しが、決して志を變へば、勇
氣を挫かず、死に至るまで
働きつゝけたりき。

わが心となし、十年、二十年撓むことなく、めいゝくの
志す事に力を盡さば、世の中の事大抵は成就すべし。

剛毅の精神の貴きことを忘るゝ勿れ。

(坪内雄藏)

一〇 楯の半面

向う。 言ひ。 争ひ。 手傷

昔、一人の勇士ありて、道を行きしに、途中に一枚の楯樹の枝に懸れり。これを見てある折しも、向うよりまた一人の武士來れり。この方の武士は、「この楯は金にて造られたり。」と言ひ、かの方の武士は、「否、銀の楯なり。」と言ひ、金なり、銀なりと、互に言ひ張りてやまず。口より泡を飛ばして争ひたる果は、遂に刀を抜きて切り合ふに至り、雙方ともに手傷を負うて、そこに倒れた

介抱 決闘 言ふ。 笑ひ。 諭したりいふ

り。かゝる所に、一人の僧通りかゝりて、二人を介抱し、しづかに決闘の理由を問ふ。二人答へて、「一人は金の楯なりと言ひ張り、一人は銀なりとするより、起りしなり。」と言ふを聞き、笑ひて曰く、「愚なるかな、二人の武士見よ、この楯は、半面は金にして、半面は銀なり。互に半面のみを見て、他の半面を知らざるが故に、争を起したるのみ。汝等、これによりて、人事はすべてかくの如きものなることを考へよ。」と諭したりといふ。

(人民讀本)

一一 かんにん

堪忍
かうべ
御許
思ひちがひ
たへしのぶ
ふえたり
仰

ある人文盲なる者を意見して、世の交は他の事はいらず、唯堪忍の二字をよく守るべし。といへば、文盲の人ばかりかうべを傾け、かんにんとは四字にて侍らずや。と指にて數へ、御許には思ひちがひなるべし。かんにんと四字にて侍り。といふ。意見せし人いふ、愚昧の人かな。堪忍とをたへしのぶと讀みて二字なり。といへば、又かうべを傾け、たへしのぶならば、又一字ふえたり、五字となり侍るべし。何と仰ありとも、吾等は四字

と思ひ侍れば、四字にてかんにんは致し侍るなり。といふ。

かの意見せし人またいふ、汝が如き愚昧のものハ實に諭しがたし、人に似て蟲同様なり。おのれがまゝにすべし。と大いに憤りければ、文盲の人笑ひて、何とも仰あるべし。吾等はかんにんの四字を知り侍れば、悪口せられても少しも腹立ち侍らざるなり。とて笑ひ居たりとぞ。その智には及ぶべく、その愚には及ぶべからず。

其智可及、其愚不可及 (論語)

(柳澤淇園)

廉潔
利慾

聚樂ノ第八豊臣
秀吉ノ第二テ、
京都ニアリキ

伺候

鑄

一二 廉潔ト節儉

古ノ武士ハ廉潔ヲ尊ビ、利慾ヲ卑シミテ、金錢ノ如キハ斥ケテ顧ミザル習ナリキ。直江兼續ハ、上杉謙信ニ仕ヘテ、武勇ノ名アリシ人ナリ。嘗テ諸大名ノ聚樂ノ第二伺候セシ時、兼續モマタ座ニアリ。談笑ノツイデニ伊達政宗懷中ヨリ金貨ヲ取り出シテ、人々ニ示シシニ、ソノ頃ハ新ニ貨幣ノ鑄ラレシ折ニテ、皆々メヅラシトテ、手ヨリ手ニ渡シメグラシテモテハヤス。御身モ見ラレヨ。トアリシカバ、兼續扇ヲヒロゲテ、ソノ

遠慮

采配

奢侈

吝嗇

嫌ヒ

上ニ受取り、ソノマ、ニウチ返シハネ返シシテ見居タリ。政宗遠慮スルナリト思ヒテ、苦シカラズ、手ニ取ラレヨ。ト言フ。兼續ウチ笑ヒテ、謙信ニ從ヒシ時ヨリ、先陣ノ下知シテ、采配振りタル手ノ汚レ候フベシ、コレニテ事足り候フ。トテ、扇ノ上ヨリ投ゲ戻シシカバ、政宗赤面シテ、返スコトバモナカリキトイフ。

サレバトテ古ノ武士モ、金錢ヲ土芥ノ如クセヨト、イヒシニハアラズ。唯ミダリニ費シテ奢侈トナリ、ヒタスラ惜シミテ吝嗇トナリ、節操ヲ曲ゲ、義理ヲ輕ンズルニ至ランコトヲ嫌ヒシナリ。アル人、征韓ノ役ニ、軍

黒田孝高入道
ヲ如水トイフ

到來 披露
指圖 漬ケ



黒田如水

到來ノ品トテ、鯛一尾ヲ家來ノ持チ出デテ披露セシ
ニ、如水指圖シテ、三枚ニオロシ、身ハ鹽ニ漬ケテ貯フ
ベシ、骨ノ處ヲバ料理シテ、客人ニモ吾等ニモタベサ

用ノ資ニ事缺
キ、黒田如水ニ
金子五十兩ヲ
借リシガ、歸國
ノ後、返金セン
トテ、ソノ家ニ
至リヌ。折カラ

(四二)

満足

セヨ。トイフ。カノ人、心ノ中ニ、サテノ客齋ナルコト
カナト、唾ヲモ吐キカケタク思ヘリ。サテカノ五十兩
ヲ取り出シテ返シタルニ、如水更ニ受取ラズシテイ
フヤウ、軍ニ出デテ生キテ還ラントハ、誰モ思ハヌモ
ノチ、サル人ニ返サレントテ、金ヲ貸サンヤ。軍用ニ立
チシハ金銀ノ徳、ソノ爲ニトテ日頃ハ貯ヘシナリ。御
身ノ事足リテ、吾モ満足ナリ。トテ、手ニダニ觸レザリ
キトイフ。コレニヨリテ、節儉ト客齋トノ別ヲ知ルベ
シ。

うづまりて

掃除

篤志

衰頹
絶えたり

坐れる

一三 立てる農夫と坐れる紳士

人もし冬季但馬國に赴かば、いづこも途は雪にうづまりて、行歩頗る困難なる中に、出石郡なる神美村は全く他村と異にして、積雪の掃除尤も行届きたるを見ん。これその村に篤志の人平尾在寛父子あるが爲なり。この地も、維新以前は、村治宜しきを得ざりしが上に、天災相繼ぎて生じ、衰頹の状言語に絶えたりしが、在寛奮ひてこれを復興せんとし、村民に教ふるに「立てる農夫は坐れる紳士よりも貴し」との言を以て

承、受
勵み

たとひ。

飢ゑしめじ

救恤
努め

教ふる

し、多年の辛苦を経て、遂にその志を遂げたり。

その子在修父の志を承けて、幼時より農事に勵み、また村の爲に力を盡せり。父に繼ぎて里正となりし時は、偶、凶年に遭ひて村民の飢渴に迫るものも少からざりしかば、たとひ一粒の米なりともわが倉に残らん限は、誓つて村民を飢ゑしめじ。もし一粒もなきに至らば、共に死せんのみとて、自ら施し、人をも諭し、専ら救恤に努めたり。されど在修は徒らに救恤のみを旨とせず、常に謂へらく、世には生きたる道德と死したる道德とあり、貧窮なるものに自營の道を教ふる

心服

勸むる、勵み

植ゑしめ

が如きは、實に生きたる道徳といふべしと。よつて當時の凶作にも、更に窮民に職業を授け、かりそめにも怠惰に流るゝことなきやうに教へ導きたりといふ。』

されば村長も村民も皆よく在修に心服して、その言ふところ皆聽かれ、勸むるところ亦行はれざるなし。故に身は村長にあらざれど、これを助けて、一村改善の事業を擧げしめ、まづ地味を肥さんが爲に、家毎に大鍬一梃づつを買はしめて、從來は淺く耕す習なりしを、改めて深く耕すこととなし、次に甘藷をその間に植ゑしめぬ。又世間には未だ農事試験場もあら

受、承

積立金

多し

ざる時、早くこれを設けて、種子の改良をなしたるはいふも更なり、村の患とする所常に水害にあることを見、天幸を受けんには、人事を盡したる後に待たざるべからずとて、偏に村民を勵まし、明治二十二年より大いに工役を起して、永久の治水工事を遂げぬ。そのほか、各種の積立金を設けて不時に備へ、併せて教育の資とし、一般に産業を振興せしめ、地主と小作人との間を親密ならしめたるなど、その村に盡したる功勞極めて多し。

(地方自治要鑑)

一四 機智

一 瑞典王と決闘

流行
 いづれも
 止みさう
 機轉
 禁制

むかし歐羅巴で決闘が大流行で、何でもない事に刀や銃を持ち出して騒いだ時代があつた。諸國の帝王はいづれも心配してこれを禁ずる法令を出したが、なか／＼止みさうにも見えなかつた。たゞ瑞典王ばかりは、一寸した機轉で決闘を止めさせたといふ話がある。

この王、ある時決闘の禁制を出したが、その後間もな

意趣

侍従武官

く二人の士官が何かの意趣で決闘をすることとなつた。去かもはや禁制も出たことであるから、國王の許可を受けねばなるまいといふので、兩人揃つて王の前へ出て願つた。王は、宜しい、許す、我も見分へ往くぞ。」と仰せられて、定めの日、定め場所へ、一人の侍従武官を随へて臨まれた。いよく決闘が始るといふ際、王は、兩人の中一方の首が落ちるまで十分は闘へ。」と言はれて、直後後ろへ振り向いて侍従武官を對ひ、それら後へ生き残つた一人の首は其方が斬つてしまふのだ。」との詞、二人の士官はジロリと顔を

願下げ

見合せ、申し合せて願下げました。これら瑞典では決闘が全く止んで了つた。

二 盲人と盗人

鄰家

或盲人が庭の隅に窃した五千圓の金を埋めて置いたのを、鄰家の男が嗅ぎつけて、夜中に掘り出して持つて往つた。盲人が確めに行つて見ると、無くなつて居るので、早くも鄰の男が盗んだものと思ひついたが、さてどうすれば取り返されるかと種々考へた結果、一策を案じ出した。

結果

一日盲人の方から彼の男の許へ行つて、四方山の話

同じやうに埋めよう

貯へる

聲

料簡

の末、自分が一萬圓の金を所持して居て、その中半分は極めて安全な所へ藏めてあることを小聲で話し、残の半分も同じやうに埋めようと思つて居るところをほのめられた。すると鄰の男は「それが何より善い方法である。大金を貯へるよりは埋めて置くに限る。」と聲よ力を入れて、切りよ勧めた。

盲人が歸つた後で、鄰家の男は急いでその庭へ忍び込んで、かの盗んだ金を元の場所へ埋めたが、これはやぶて一萬圓もなつた上で、再び奪ひ取る料簡であつた。處が大當違ひ。盲人は二三日経つてから、先に金

を埋めた場所を掘り起しはしたる、後の半分を埋めようとはせず、今戻つてある前の五千圓を掻出しながら獨笑をして、折々は盲人の方の眼の二つある者より善く物を見るものぞと言つた。

(西洋笑府)

一五 俠夫

秘藏

秘藥

某の家に秘藏の皿二十枚あり。若しこれを破る者あらば、一命をとるべしといひ傳へたり。然るに一婢誤つてその一枚を破りしかば、人々舉りて驚き悲しむを、裏に米を舂ける男これを聞きて、我が家に秘藥あ

和げ

り、破きたる陶器を繼ぐよ、その痕を止めず、頗る奇妙なり。まづその皿を見せ給へ。といふに、皆色を和げて喜び、その男を呼びて見せしに、二十枚を重ねてつくづくと見るふりして、持てる杵にて悉く微塵に打ち碎きぬ。

償ふ。

人々こまは如何にと呆れたれば、笑ひていふ、一枚破りさるも、二十枚破りさるも、同じく一命を召さるゝならば、皆わが破りさりと主人に仰せられよ。この皿陶器なまばいつら破るゝ時あるべし。然らば二十人の命に關るを、われ一人の命を以て償ふなり。繼ぐ

從容
子細

べき祕薬ありと言ひさるは、たゞかくせんが爲なり
き。」と、從容として恐まゝるけしきもなく、主人の歸を
待ちたるに、主人歸りて子細を聞き、その義侠に感
じ、城主に具申して士に取立てりしが、果して廉吏
なりきといふ。

(閑田耕筆)

一六 海舟の苦學

海舟は勝安芳
舶載

新刊
購はん

海舟、若き頃、西洋式の兵術を學びしが、舶載の兵書極
めて少く、常に良き書の得がたきを歎ぜり。偶市中の
書肆を過ぎて、新刊の一書を見、これを購はんと思ひ

(巻二)

辛うじて
調へ

問、訪

即、乃
訪、問

聽(聞)

なほ。
乃、即



勝 安 芳

て、その價を問へば、五十兩
と答ふ。當時、書生の身分な
れば、五十兩の金は直に得
らるべくもあらず、十數日
を経て辛うじてこれを調

へ、勇んで書肆に至れば、かの書は既に賣れてなし。海
舟遺憾にたへず、買ひたる人を問へば、四谷に住める
與力某なり。即ち歩を轉じてこれを訪ひ、切に情を陳
じて兵書の讓渡を請ふ、某聽かず。已むを得ず借覽を
請へども、なほ聽かず。乃ち曰く、書間は足下に要あら

執拗

ん、夜間寝れたる後は、貸さるとも不可なかるべし」と。某その執拗に驚き、答へて曰く、夜更けて後は、貸すとも可なり。然れども戶外に持ち去ることを許さず」と。海舟その翌夜より通勤を始む。

不審

當時、海舟は本所に住み、某の家は四谷に在り、相距ること殆ど一里半。されど雨風烈しき時も、曾て往復を廢せず、又一夜もその時刻を違へず。かくの如くすること半年餘にして、遂に八卷の兵書を手寫するを得たり。乃ち更に主人に面會し、全部を寫し終へたることを告げて、その厚意を謝し、且二三の不審の點を舉

慚愧
たへず

げてこれを質す。主人驚いて曰く、僕は寫すべき勞もなきに、足下の如く未だ全部を通讀するに至らず、實に慚愧にたへず。野人寶をもつとも何にかせん、請ふこの書を足下に呈せんと。海舟既に寫せる一部を有すればとて、固辭すること再三なれども、主人聽かず、遂にこれを受けたり。

(海舟言行錄)

一七 フアラデイ

頃
鍛冶

第十八世紀の末の頃、ロンドン市にフアラデイといへる鍛冶ありき。四人の子ありしが、家貧しければ、高等

いづれも

遊戯

繙き

事項、頃。

の教育も授けられず、讀書、算術の初步を學ばせたる
 後は、いづれも自活の途に就かしめぬ。三男マイケル
 は、一七九一年に生れ、十三歳にして新聞賣子となり、
 その翌年、ある家に奉公して、製本業を見習へり。され
 ど天性深く學問を好み、遊戯に耽り易き年頃なるに、
 暇だにあれば、装釘のため手許にある書を繙き、特に
 意を化學、電氣に關する事項に注ぎ、時には簡單な
 る電氣機械をさへ案じ出せり。その兄もこれに感じ、
 多くもあらぬ所得を割きて、學術講義の聽講料に充
 てしめたり。

顧客

丁寧

有望

傍

儘

一顧客またその篤學に感じ、勸めて當代の大學者サ
 ーハンフリーデイビの講義を聽かしむ。マイケルそ
 の筆記を丁寧に清書して、装釘を美にし、これと共に
 一書をデイビに贈りて、己の志を陳ぶ。デイビ懇に返
 書し、誠めて、科學が決して財産を作る道にあらざる
 を説く。されど固より彼を斥けたるにあらずして、有
 望の才は直にこれを認めたるなり。そのマイケルよ
 りの書簡を見るや、これを傍なる人に示す。その人、さ
 らほど熱心なる男ならば、試に儘にても洗はすべし。と
 いへば、デイビ首を振り、いや／＼さやうの事をせさ

すべき人にあらず。といへりとぞ。

その折は好地位もなかりしにや、そのまゝにて暫しうち過ぎしが、ある夜マイケルが寢に就かんとせし頃、デイビの使來りて、明日來るべしとのことなれば、明くるを待ちて馳せ行きしに、嬉しくも皇立學術協會に助手として雇ひ入れんとなり。これよりマイケルは専ら學問に従事することを得、種々の實驗を積み、屢研究の結果を發表して、名聲日々に揚れり。のち學士會員に選ばれて、種々の講義をなしたりしが、特に小兒に對して通俗平易に説き和ぐることを好め

實驗
研究
通俗
平易

り。學識深遠なる大家が兒童を對手としたるは、學界の美事といふべし。

近頃電氣學の非常に進歩せしこと、その功を數ふれば、マイケル「フラデー」を第一とすべし。マイケルは深くその學を究めて驚くべき大發明をなし、その發明はまたいろくの事物に應用せられたり。今日強度の電氣を用ひて大いなる機械を自在に運轉せしむることを得るは、實にこの發明の結果に出でたるなり。かくの如く世を益せしこと多ければ、大英國の崇拜はその一身に集り、盛名世界に轟くに至れり。然れ

非常
應用
崇拜



イデラフ

ども幼時の窮乏を忘れず、常に亡父を追慕して、吾は鍛冶に關することを好む、わが父は鍛冶職なりき。」といへり。老母はなほ在りて、

晩年

深く愛兒の立身を喜び、フアラデイもまたその晩年を慰むるを以て最大の快樂とせり。

則、乃、即

四十九歳の頃よりして、過勞の腦は時に衰弱の病にかゝることあり。されど病少し怠れば、則ち研究を續け、朝、實驗室に入れば、食事也十分にせず、夜十一時ま

書齋

では、わき目もふらずして學事に勵めり。一八六七年八月廿五日、書齋の椅子に凭れるまゝ、瞑目せり。英國名士の墳墓地たるウエストミンスター寺院に葬る、遺言によりて、質素なる墓石にその姓名と生死の年月とを記せるのみ。

遺言

一八 戦前の一曲

明治卅七年二月、仁川沖の戦に、淺間艦長八代大佐が従容として吹きすすびたる尺八の千鳥の曲は、餘韻永く残りて、後の世までも絶ゆまじき演奏なるが、そ

海軍大佐八代六郎

演奏

海軍中將片岡七郎

接觸

海軍大佐奥宮衛
控へたる

千歳の一遇

の後、これと相ならびて著しき物語は、日本海
の海戦に
加りし松島艦の上に起りたり。
頃、廿八年五月廿七日、松島は片岡中將の率ゐたる艦隊に加りて、敵の艦隊と接觸を保ちつゝ、沖の島の方へと進む。砲火未だ交らず、風浪殊に物凄し。艦長奥宮大佐は、大敵を眼前に控へたる今この時、一艦の士氣如何ならんと、まづ下士卒の様子に意を注げば、少しも平生と異なることなく、互に敵の陣形の勇ましきをほめつゝ、彼はスワロフぞ、此はアリヨールよ。さても面白き今日の出會かな、千歳の一遇とはこの事

耽る

た。と。ふ。ふ。や。う。

態度

堪能
聞、聽

辭む

なるべし。など、唯パノラマなどを観るやうなりしが、やがては品さだめにも厭きたるにや、一所に圓く坐りて雑談に耽るもあれば、また午睡の夢を樂しむもあり。いづれの國の軍人が、戦前數分時にありて、かくも冷靜なることを得るものぞと、艦長の満足たとふべきやうもなかりき。
事の序に將校の態度をも窺ひ知らんと思ひ、恰もそこに來かゝれる一軍醫を顧みて、今日こそ最後の戦争なれ。君は日頃薩摩琵琶に堪能なりと聞く、いかでか名残の一曲を奏せざるべき。と望めば、辭みもやら

餘興

拍手

聽、聞

危機

沈勇

覺えず

で、祕藏の琵琶を取寄せ、甲板の上にて弾き出でたるは川中島の曲なり。居合せたる將校もよき餘興こそ始りたれと、軍醫を圍みて耳を澄せば、緩急よく調ひて一絲亂れず、千軍萬馬の馳せ違ふ昔の様は手に取る如くなるに、拍手の音は甲板の隅々に鳴り渡りぬ。艦外には敵艦愈、近くして、艦上には彈奏益妙なり。聽くものいづれも國家存亡の危機の一秒毎に迫りくるを忘れたるが如く、身は大敵と砲火の間に相望まんとしながら、なほも心を川中島に馳せ居たる沈勇の程は、下士卒の冷靜と相對して、艦長をして覺えず

感涙

征服

率ゐ。潮

感涙を流さしめたりとぞ。

(雜誌海軍)

一九 小早川隆景

小早川隆景は毛利元就の三男なり。兄吉川元春と共に、父を助けて中國を征服し、父子兄弟の武威海内に振へり。

征韓の役、隆景一方の將としてかの國に出で戦へり。明將李如松廿萬の兵を率ゐ、平壤を抜きて、潮の如く王城に迫り来る。わが將皆王城に集れるに、隆景獨り開城にあり。これを招けば曰く、われまた生きて還ら

屍 思出

んとは思はず、屍を敵國に曝すとも、存分に戦うて、手並の程を明軍に示さんこと、老後の思出ぞ。とて、動かず。大谷吉隆が來りて切に諫めしによりて、やうやく

交ふる



小早川隆景

兵を還ししが、なほ郊外の碧蹄館に留る。愈、兩軍鋒を交ふるに及びて、隆景真先に馬を進めて縦横に突撃し、威風あた

僅に

りを拂つて摩利支天の如し。明軍微塵に碎けて、討死數萬人、李如松も僅に身を以て免れたりといふ。

容易

隆景はまた智謀を以て世に聞えたる名將なるが、事を爲すに當りて、深く慮りて容易に斷ぜざりき。嘗て

可否

黒田孝高に對ひて曰く、貴殿は天性聰明にして、何事も即座に可否を決斷せらる。これによりて處置甚だ

是非

速なれども、十分に思慮を盡さざれば、折々は本意ならず思はるゝ事あるべし。われは才鈍ければ、心を傾け考を盡し、力のかぎり是非を計りて、然る後手を下

右筆

す故に、後悔すること稀なり」と。又ある時、右筆に物か

徐かに

熟考
悔悟

かすとして、命じて曰く、急用なり、徐かに書くべし」と。
隆景また人に語つて曰く、人に意見するに、すぐさま
合點するものは當にならず。よくよく意見の語を聽
きて、腑に落ちぬ所は幾度も問ひ返し、熟考の後、成程
と悟るものは、悔悟の心永く移らざるべし」と。

二〇 歸省

勢
終

勢よく打つたる鈴かねの響に、覺えず小躍して、先生に怪
しまれしは、われながら恥づかしけれど、これがこの
學期の終と思へば、嬉しさに堪へ難かりしなり。書物

故郷
面影

土産

懇意
世話
訪問
叔母上

も筆記帳も抛ちて、叱られぬ時の來れる爲か、否。登山、
海水浴、意のまゝに遊ばるゝ故か、否。これらも嬉しか
らぬにはあらねど、この鈴の鳴りし時、ふとわが眼に
浮びしは、故郷の面影なり。故郷には父母います、われ
は今歸りて、その膝下に跪くことを得べき身となり
たるを喜べるふり。

まづ町に出でて、兩親の好みたまふもの、弟妹の喜ぶ
ものなどを、心ばかり土産に買ひ求め、又暇乞にとて、
懇意にし世話になりし家々を訪問す。芝なる叔母上
の家にて、せめて一夜は泊りくれよと、切に勧めらる

強ひて
閉づれば

やうやく

行李

切符

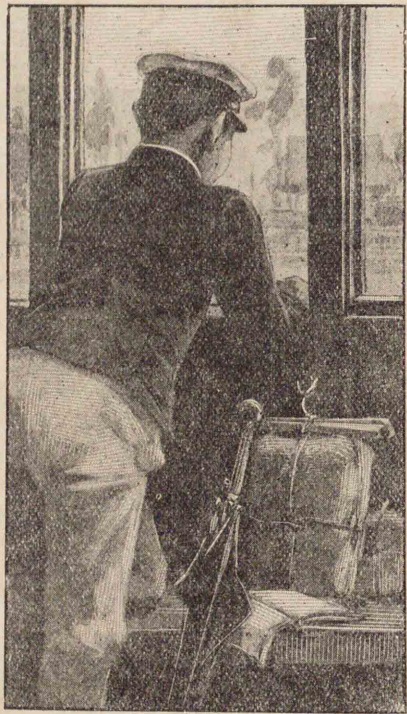
るに、辭み難くて、已むを得ずその夜は都に泊りぬ。床に入りても寐られず、時計の音耳に立ちて、汽車の走るかと聞え、強ひて瞼を閉づれば、明日の光景腦中を駆け廻りて、走馬燈の如し。寢返りしくして、ながくしく思ひし夜も、やうやくにして白めり。飛び起きて叔母上を驚かし、朝飯もそこく、禮もそこくに、枕頭の行李を提げて、停車場に駆けつけたり。横雲東にたなびきて、鳥の聲も勇まし。いかにして切符を買ひたるかも覺えず、列車の一隅に座を占めて、安堵の息をつけば、曉の空に汽笛の聲

出づ。

笑む

迎ふる

高く響きて、車輪は轉じ出づ。この春、選抜試験を受けんとて上りし時とは、窓外の風景いたく趣を異にし、見渡す限、山も水もわが喜を分ちて笑むかと疑はれ、前なるは迎ふるが如く、後なるは送るが如し。心も



軽く、身も軽く、驛の名はよくも覺えれど、一つ二つ三つ四つと數へて、十三番目は即ちわが故郷の

停車場なりけり。

と思ふ間もなく、兄上と叫びしは、早くもわれを認め、
て、雙手を挙げたる弟の聲なり。見れば父上も來ませり、
母上もおはす、妹のさても大きくなりしよ。母上は涙ぐみ
て物も言ひたまはず、妹はやゝ呆れたる様なり。無事なりしか
と父上の立寄りたまふに、つと胸塞がりて、たやすくは返事
も出でかねたり。途すがらかれ一句、これ一句、いつしか幾
夜の夢に通ひしわが家に着きぬ。家の様は春に變らず。

途すがら

二一 螢

待ちに待つたいろくの春の花も、咲いては散り、咲いては散つて、
やがて木々の青葉が目も覺めるほどさえずりと眺められる頃
となると、晝間の遊もやうやう暑くるしくなつて、軽い衣に夕
風のそよぐ日暮が何ともいはずこゝちよい。散歩に出て、知らず
知らず町はづれまでもゆき、つい夜に入つて歸る途で、ゆらり
くと飛んで來る螢を見つけたのは、誠にうれしいものである。
かうなると、年寄も若い者も、男も

青葉

町はづれ

男

女最寄

女も、われもくと最寄の水邊に出て行つて、夜の更けるのも知らず、螢狩をして遊ぶ。

實に世界中で、日本ほど螢を珍重する國はあるまい。螢の名所の石山に行くと、螢狩の爲に立派な茶屋が澤山出來てゐて、諸方から遊に來る人を待つてゐる。また宇治の螢狩の爲に、特に回遊列車が出る程である。併し昔の事は知らず、今日では、實際かやうな名所に生ずる螢は割合に少いので、別に螢の産地から持つて來て、土産物として賣るのである。

螢の産地として名高いのは近江の守山、今宿邊であ

回遊列車
實際

營業

輸出

河

取りまはつて

箒

る。この地方に往くと、螢とりを營業にしてゐる家が何軒もあつて、年々何百萬といふ螢を捕へて、近國へ輸出する。少し手廣くやつて居る問屋になると、螢を捕へる者を七十人位も使ふ。この螢とりは軽い扮装をして、蚊帳の裂で拵へた、長さ二尺五寸、幅三四寸もある袋を、三つ四つ腰に下げて出かける。さうして河の中でも叢の中でも、一向かまはず取りまはつて、夜の二時、三時頃まで續ける。夜明に近くなると、螢は段段叢の下蔭に降りたり、草の中にもぐりこんだりする。さうなると、螢とりは棒か箒のやうなものでそこ

搔きまはす

を搔きまはす。搔きまはされると、螢は頻に光を放つ、それを目がけて捕へるのである。捕へた螢は一々袋の中へ入れる暇がないので、捕へては口へ、捕へては口へと、はふりこむ。よい加減に溜ると、袋へ吐き出す。ちやうど鵜を使つて香魚を捕らせるのと同じことである。

は。ふりこむ

數

これに就いて思ひ出したことがある。米國は螢の多い國で、毎夜墓が出て、その螢を數の知れぬ程捕つて食ふが、螢は墓の腹の中で暴れまはつて、盛んに光を放つ。その光が墓の腹を透つて、外へぼうと明るくな

透つて

卷二

燈籠

つて見え、ちやうど生きた墓の燈籠といふやうなものができる。これが面白いと言つて、その地の子供は、墓に螢を食はせて、その腹が光るのを見て楽しむのである。それでも、しわが國の螢とりも口にくはへた澤山の螢を呑み込んでしまつたならば、その光はやつぱり腹を透つて、人間の生燈籠とでもいふやうなものができるかも知れぬ。

(螢の話)

二二 富士登山 その一

今年もまた富士山に登らんと急に思ひ立ちて、つれ

草鞋装

飯田町は東京市
麴町區にある中
央線の終點驛
越えて

をも誘はず、脚絆、草鞋の装に身も軽々と、朝早く飯田町の停車場に到る。

武藏の平野を走れる汽車は、八王子を越えて、漸う山間に入り、西へくと進みて、甲府の方へ向ふ。有名な猿橋を過ぎ、正午頃、大月にて吾は汽車を下りぬ。馬車はあれど乗らず、八月半ば、照りつくる日に土も石も焼くるやうなる道を、何のそのと急ぐ。富士見平に至れば、富士の姿の遠く吾を招くが如く見ゆるに、益勇み立ち、行きくして日暮に吉田に着きぬ。大月よりこゝまで凡そ六里。

遠く

とほり

方面

距離

界

閉づる

設備

そもく、富士山は、望みても知らるゝとほり、なだらかなる山なれば、いづれの方面にも登山口あり。東は須走^{すしう}及び中畑に、南は須山に、西は大宮にありて、これらはいづれも駿河に屬し、北は甲斐の吉田にあり。各道とも、麓より絶頂までを十合に分つ、一合の間、距離の長短同じからず。途中特に合の界に室を設けて、登山の人の休泊所とす。毎年、太陰曆の六月一日に山を開き、太陽曆の八月卅一日に閉づる定めなり。諸道のうちにては、北口の設備最も整へりといふ。昨年わが登りしは東の須走口なれば、今年は途を變へてこの

口を取りたるなり。

吉田にて一泊し、同宿の客三人と共に強力一人を雇ひ置きけり。翌朝まだ眞暗なるうちに起き、強力に布子餅などを擔はせ、吾等は金剛杖をつきたるばかりにて出づ。まづ町はづれの淺間神社に詣づ。この祠のうしろより、途は裾野にかゝる。夜の明くるに従ひて、百合、女郎花の花もあざやかに、鶯、雲雀の囀るも聞ゆるに、朝露に濡れつゝ、進む心地すがくし。馬返しまでは平かなる裾野にて、馬に乗りても行くべけれども、こゝより先は馬きかず、故にこの名あり。

出づ。まづ。はづ。れ。詣づ。

囀る

今日にては五合目まで馬を通ず

八二

生ひ茂り

登山の道は九里十里もありといへど、實際の里程はその半なり

大抵

勾配眺望低、大抵

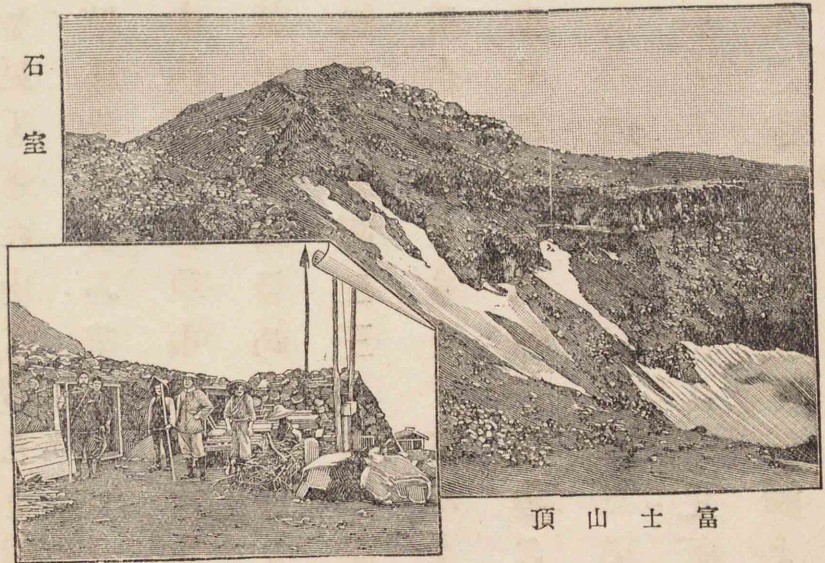
岩

されどまだ山に登るとも思はれぬ程なり。いつしか樅檜途を夾みて生ひ茂りて、常の山路に異ならず。富士山は俗に草山三里、木山三里、禿山三里といへるが、木山の五合目あたりまで續けるは吉田口に限り、他の口は大抵二三合目までなりといふ。五合目あたりよりは木もなく、草も稀に、焼石、焼土ばかりにして、山陰には雪の残れるところもあり。登るに従ひて勾配の急になると共に、眺望もよくなり、高かりし四方の山は一足毎に低くなりまざる。七合目を過ぎては、一步は一步より險しけまば、杖を力に、岩

老いたる

大いなる

なほ。



にすがりて登るに、息も切れんとす。かゝる險路を、老いたる一群の道者が、六根清淨と唱へつゝ、平氣に登り行くは驚くべし。
 八合目にて、途は須走より登る途と合す。こゝに大いなる石室あれば、吾等もこの室に泊ることと定む。されど日なほ高ければ、頂上

藏め

を見て來んとて、苦しき息をつきつゝ登る。頂上には挿鉢の形したる噴火口の跡あり、周回凡そ十五六町中には千秋の雪を藏めたり。これを周りて八峯あり。就中劍峯最も高くして、こゝに淺間の奥宮あり。木花咲耶姫を祀れり。また觀測所あり。噴火口の外圍を巡るを御鉢めぐりといふ。その途中少し降りたる所に金明水、銀明水の二泉あり。

二三 富士登山 その二

今しも吾は日本一の高き處にあり、五千萬人の上に

大子
火服
命
九
命

舞ひ渡る

立つてどうぐくと足踏みならす心地よさよ。箱根、足柄、愛鷹等の山々は椀を伏せたる如く、山中、河口、本栖等の湖は杯水の如し、綿のやうなる雲折々その上舞ひ渡る。眼下の山海は、近しといはんか、遙なりといはんか、恰も盆石を飾れる如く、また地圖を擴げたる如し。天氣のよき爲に、三浦半島あたりの海上に富士山の影は映れり、これは御影と稱して、稀に見らるゝものなりといふ。吾等の影も山の影と共にかの海上にあるべし。

骨組

さて八合目の室に歸りて宿る。室は太き木を骨組に

近年この八合目にはやゝ宿屋らしきものも出来たり

稀薄

し、石にて疊み、廣さ廿疊ばかり、すべて板敷にて、中央に爐を切りたり。細き燈火一つともし、焚火の煙室内に満ちて、まことに太古の生活もかくやと想はる。空氣の稀薄なる爲に、人々の顔は黄に、唇は紫に見え、中には山酔にかゝりて悩めるもあり。これ登山者の特に注意すべきことにて、はじめ途の安きを侮りて急ぎ登るものは、早く疲れて、これにかゝり易しといふ。布子を纏ひ、同伴の人々と共に一枚の蒲團を着て寝たるが、寒氣強くしてよくも寐られず。翌朝、日の出を見んとて、早く起きて戶外に出づ。天は清く晴れたれ

寝、寐
寐、寝

間

ども、脚下は一面の雲の海なり。薄黒き雲はやがて白くなり、ついで赤くなり、さて一瞬、朱盆の如き日は昇りぬ。昇ること暫くにして、金光八方に散じ、天地全く明かなり。

室に歸りて朝飯を喫し、吉田より同伴せし人々に別れて、只一人中畑口に向ふ。降路は砂走とて、砂の上を降るに、滑るが如くにして止る所を知らず。わけてこの口は砂走の間長くして、七合目より三合目までは、息をもつがず落つるやうに降り、その間に四足の草鞋を破れり。暫くのうちに砂走も過ぎて、樹木の茂れ

二二

費す

る途に入り、裾野を通りて、中畑に着きしは、朝の八時過なり。登るには十餘時間を費し、降るには二三時間にて足る、下山の面白さこれにても察すべし。

顧みる

昨年、は山上にて暴風雨にあひ、室の中にて二日を過し、景色も眺められず、逃ぐるやうにして降りしに、この度は稀なる好天氣にて、前の憾もはれたり。御殿場に着きて顧みれば、富士山はほゝ笑みて吾を送るが如し。日高きうちに新橋に着きぬ。

聞きしよりも、思ひしよりも、見しよりも、

のぼりてたかき山は富士れぬ。

荷田春満の歌

二四 長良川の鵜飼

生業
簡單
網(網)
複雑

淵源

漁業は、太古より行はれたる人類の生業にして、また
娛樂の一なり。その法は手摺の簡單なるものより、大
網の複雑なるものに至るまで、種類頗る多けきども、
動物を使役してこれを行ふものは獨り鵜飼あるの
み。

今鵜飼の歴史を尋ねるに、神武天皇の御製にも、鳥つ
鳥鵜飼の伴といへる如く、その淵源甚だ遠し。奈良、平
安、兩朝の歌集、物語にも、大和の芳野川、山城の桂川な

散見

どこれお名所として散見するを見まば、その盛んな
りしこと推して知るべし。

捕獲

平治元年は一八
一九年

長良川も、また鵜飼の名所として古き歴史を有せり。
その捕獲したる鮎を朝廷に奉りしは、醍醐天皇の御
代に起りしものにして、平治元年源頼朝待賢門の戦
に破れ、單騎東國に落ち行く途すぶら、美濃國藍見川
の下流なる某村に着きて、一老翁の家に逗留せし時、
翁は鮎の鮓を獻ぜしむ、頼朝征夷大將軍となるに及
び、老翁の子孫を召し出して金銀を賜ひたり。爾來こ
の地方より干鮎を獻ずること恆例となりて、鵜飼の

恆例

逗留

保護、捕獲。

隸屬

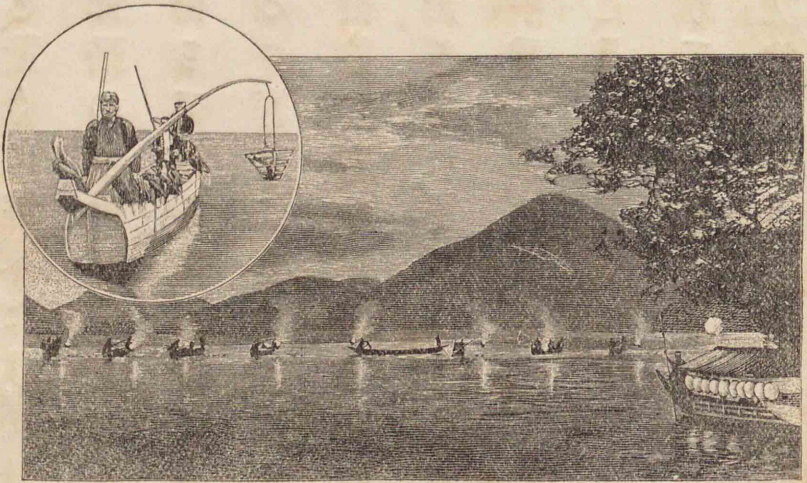
舳艫相啣み

操縦

業も盛んになれりといふ。
 明治の世となりて、鵜匠の保護も自然止みたまはば、この業一時衰へたりしが、二十三年鵜匠を宮内省に隸屬せしめ、長良川に三个所の御獵場を設けられたれば、この地は今は日本一の鵜飼の名所となり、年々繁昌するに至れり。殊に近年は内外人の來觀するもの益増加し、盛暑の候は、見物の船舳艫相啣みて、彩燈は水を照し、頗る美觀なり。

鵜舟は一艘ごとに篝火一つづつを焚き、十六羽の鵜を使ふ。鵜匠舳に立ちて十二羽の鵜を操縦し、中使と

手際



舟 鵜

飼 鵜 の 川 良 長

いふが舟の中腹に居て四羽を使ふ。その篝火は鐵の籠に雌松の割木を焚き、鵜は一羽づつその頸を糜ぎて、繩の本を一にして鵜匠の手に握るなり。鵜の水中に入りて働く時は左に搓れ右に縛るゝを、鵜匠は、一絲亂さば巧にふり捌き行く。その手際の鮮かなるこ

宵暗

と、驚くに堪へたり。

機熟す

宵暗の頃、日没前より漸次上流に溯り、日の暮るゝを待ちて舟を下し、漸く夜も更け初めて、鵜使ふ頃となるや、篝火は盛んに燃えあがりて水を照し、雲に映じ、機熟するを見て鵜匠は聲を立てて鵜を勵ます。鵜は舟を離れて勇ましく水中に潜り、前後左右をあさる。中乗、艫乗の人も共に聲を揚げ、舷を敲いて鵜を勵まし、且鮎を驚かす。鮎は驚いて逃げ迷ふを、鵜は先を争うて追ひつめ追ひ廻し、嚙んでは浮き、浮きてはまた沈む、そのさま勇ましくもまた殊勝なり。

殊勝

二五 京城

街衢
李氏はもとの朝鮮の帝室

京城は一に漢城といふ。北には北漢山、鷹峰峙ち、西北には仁王山、東に駱駝山、南には南山あり。周圍に城壁を廻らし、街衢はその中にありて、城内の廣さ東西三十餘町、南北二十町餘、李氏五百年代々の都のありし處なり。

宏大
般賑

地勢頗る京都に似て、市街を東西南北中の五署に分てり。街路は平坦にして、南大門より鐘路に至る街の如きは、その幅も廣く、宏大なる商店軒を並べ、最も般

あらゆる
機關

心地



京 城 の 市 中

賑なり。市中には電話、電信、電氣
鐵道等あらゆる文明の機關悉
く備りて、内地人の居住する本
町及び明治町などを通る時ハ、
身は東京又は大阪、京都の繁華
なる市街を行く心地し、海を隔
てて遠く來りたるの感なし。こ
れ皆朝鮮がわが保護に歸して
よりの事なるべし。
もとの統監府即ち今の總督府

儼然として

御稜威

眞先

陸軍少將大島義
昌の率ゐたる混
成旅團

構造

及び朝鮮駐劄軍司令部等は日本町に續きて、南山の
裾に儼然として立ち、北の方舊朝鮮王宮と相對して、
呼べば應へんとし、旭日の國旗風に翻りて、朝鮮十三
道の臣民悉く陛下の御稜威に靡けり。又南山の中腹
にある倭將臺は、昔豊公征韓の時、増田長盛の築きし
ものにて、日清戦役の時には眞先に大島旅團の本部
を置きし所、今は公園地となれり。京城市街を瞰下し、
景色絶佳なり。その附近には文武官吏の邸宅多し。
昔は下水の設備なく、また井戸の構造も不完全なり
しが爲に、市中の井水は概ね鹹味を帯びて、飲料に適

往時

改良

せざりしかば、住民は水汲人を雇ひて、鹹味の少き井戸より水を汲み取らしめ、或はこれを買ひ求めたる程なりき。されば古來清水を大切にして、これを薬水と呼びたりと聞けども、今は上水道も通じたれば、市中到る處に清水を得べく、又下水の排出にも注意すれば、往時の不潔と不便とは見るべくもあらず。然れども朝鮮人のみの専ら住める町に至れば、今なほ家は屋根低く、窓少く、夏などは見るも暑くるしく、不潔を極む。されど朝鮮人は少しもこれを意とせざるが如し。これらは今後次第に改良すべき所なるべし。

服装
綺麗

威儀

労働者

一見

内地より京城に來りて殊に異様に感ずるは、朝鮮人の服装なり。皆冠り帽をかぶり、白く綺麗なる筒袖の衣を着、白足袋、白靴をはき、上には周衣とて外套の如きものを被り、これを紐にて結びて裾の方にて次第に廣がるやうにし、威儀正しく悠々と市中を闊歩し、又轎に乗りて行くもあり。労働者及び下等商人などの賤しき者はたゞ外套を纏はざるを異なりとす。されど中には斷髮洋装、馬車を軋らするものもなきにあらず。上下悉く鬚髯を蓄へて、長き煙管を携ふるは、一見奇といふべし。

將來

京城には内地同様の中學校、高等女學校、小學校あり、朝鮮人のみを教ふる専修學校、高等普通學校、女子高等普通學校、その他各種の學校ありて、教育は將來ますます盛んならんとす。

併合

連絡船

むかしは高麗、三韓と稱して、歴史、物語にのみ聞きし朝鮮も、今や併合せられて、わが國の一部とはなれり。夕方東京を出づれば、翌日の同じ頃には下關に達すべし。その夜連絡船に乗り、波の上に一睡せりと思ふ間もなく、はや明け方の釜山港は眼前にあり。やがて京釜鐵道線によれば、圓月の駱駝山頭に上る頃には、

同胞

開拓

普及

南大門の停車場にわが同胞の笑顔に迎へられ、共に快く夕食の膳に向ふを得べし。今後内地の人々は奮つて海を渡り、その土地を開拓し、その人民を指導して、一日も早く文化を普及せしめんことを力むべきなり。

二六 食物

注意

食フ。

食事ハ、人生ノ三大要件ノ一トシテ、一日モ缺クベカラザルモノナリ。故ニコレニ對スル注意ハ、最モコマヤカナルベシ。然ルニ世ノ中ニハ、食フコトノミヲ知

味フ。

リテ、味フコトヲ知ラズ、味フコトヲ知リテ、食物ト人身トノ關係ヲ知ラザルモノアリ。或ハ多少ソノ理ヲ知リテモ、コトサラニコレニ背クモノサヘアリ。

影響

與フ。

食物ノ人生ニ及ス影響ノ大イナルコトハ、家畜ヲ飼ヒテ試ミバ明カナルベシ。雞ニ惡シキ食物ヲ與フレバ、良キ卵ヲ産マズ、牛ノ食物惡シケレバ、ソノ乳粗惡ナリ。馬モ、豚モ、皆食物ノ良否ニヨリテ、ソノ體質ハ變化スベシ。人モコレト同ジク、體格ヲ逞シクセントセバ、筋肉ヲ養フベキ食物ヲ用ヒザルベカラズ、腦髓ヲ發達セシメントセバ、腦髓ノ營養分トナルベキ食物

體格

養フ。

ヲ取ラザルベカラズ、時期ニヨリ體質ニヨリテ、ソレゾレ食物ヲ擇ブベシ。

無分別

コノ道理ヲ思ハズシテ、世ニハ、筋肉ノ運動ダニセバ、食物ノ良否ハ問ハズトモ可ナリトシ、唯滿腹スルヲ以テ足レリトシ、或ハ健啖ヲ誇リテ暴食スル無分別ノ人ナキニアラズ。カ、ル人ハ滿身ノ力ヲ胃ノ爲ニノミ費スヲ以テ、腦ノ發達ナドハ思ヒモヨラズ、從ヒテコマヤカナル思考ヲ要スベキ事業ニハ到底堪ヘ得ザルモノナリ。抑、人ハ生キンガ爲ニ食フモノニシテ、食ハンガ爲ニ生クルモノニアラズ。昔ヨリ大食ノ

堪へ。

大概 人ハ腦力鈍ク、腦病ニ苦シム人ハ大概胃ヲ害シタル人ナリトイフ。故ニ天命ヲ保チテ、功業ヲ遂ゲント欲セバ、必ズ食物ノ人身ニ及ス原理ヲ明カニシテ、ソノ法則ニ違ハザランコトヲ期スベキナリ。

二七 石田三成

島勝猛 閑居 天正元年は二二三年 賓客 上洛

島左近はじめ大和の筒井順慶に仕へしが、のちに浪人して近江に閑居せり。天正の末、石田三成同國水口を賜はり、強ひて左近を招き、賓客の禮を以てこれに遇す。三成上洛の時、秀吉これに問うて曰く、加増の後

申す

珍し
手づから
羽織

佐和山も近江國
にあり

いかほど武士を召し抱へたるぞ。只一人を得候ふ、島左近と申す。左近は名高き者なり、少々の祿に繋がるるものにあらず。臣の祿高四萬石のうち一萬五千石を與へ候ふ。秀吉感して、主従の知行にさほどの高下なきは珍し。とて、左近を召し、手づから菊桐の紋つきたる羽織を與へて、これを勵ませり。

その後、三成封を佐和山に移され、二十三萬餘石を食むに及びて、左近の祿をも増さんとす。左近辭して曰く、臣が知行は輕からず、君五十萬石に上り給ひても、臣はこれにて事足り候ふべし。願はくは末々の者に

童謠

いへらく



石田三成

三成常にいへらく、「奉公人はその祿をすべて有益の事に散じて、残すべからず、残すは盗なり、遣ひ過して借金するは愚なり」と。されば佐和山の城陥るに及び

與へ給へ。」とて受けず。當時の童謠にも、「治部少輔に過ぎたるものが二つあり、島の左近に佐和山の城」といへり。

みづから

儉約

て、諸將城内に入りて見しに、建築甚だ粗末にして、室内は板張か鹿壁にて、庭園に樹木の物ずきもなかりしかば、人々みな意外に感じたりといふ。三成はみづから儉約を守りて、厚く人を遇するもの、左近の如き勇敢の士が、心を傾けてこれに仕へしも、宜なりといふべし。

二八 忘れられぬ父の訓誡

嚴格 斟酌

余の父は極めて嚴格な方で、少しの過失でも、決して斟酌しない人であつた。余が十五の時、丁度ペルリが

序

値段

贅澤

機嫌

始めて浦賀に來た年であつた、余は叔父に連れられて江戸に行つた。序に自分の本箱と硯とを買つて歸つた。兩方で二兩ばかりであつた。初め値段を話して居る時には、父は何とも言はなかつたが、その品物を出して見せたれば、餘り品が贅澤すぎるといふので、非常に御機嫌を損じた。

「質素儉約といふことは、人の心得ねばならぬことである」と豫ねど、言ひ聞かせて居るではないか。如何に子供心でも、家柄に適して居るか居らぬか位の考がなくしてはならぬ。不適當と知りながら、氣に入つた

折角

辯解

見識

遁辭

まゝに買つて來て、使ふといふやうでは、その心が已に家を滅す根性である。この品は斷じて用ひることはならぬ。直に火を附けて焚き棄てよ。」と言つて、叱られた。折角買つて來たのに、是程叱られるとは心外である。私も、叔父さんに相談して、叔父さんが差支なからうといふことで、買つてきた譯です。」と辯解して見た。すると父は益々怒つて、「お前は今幾歳であるか。十五といへばもはや成童である。元服して一人前とならねばならぬ歳ではないか。それに尙一個の見識を持たぬやうでどうするか。然るに殊更に遁辭を使つて

卑屈

覺束ない

罪を免れようとする卑屈な根性では、將來世に立つことも覺束ない。よし叔父さんが何と言つても、一見して欲しいと思ひ、直に買つて來るのは輕卒である。若しまた考へた上で買つたとすれば、質素の念を缺いて居る。何れにしても、その心得は身を亡し家を破る基である。

諄々
粗放

「かやうな不孝な子を持つたことか。」といつて、昔支那で殷の紂王が象牙の箸を作られたのを見て、その臣が歎じたといふ例を引いて、諄々と責められた。元來余は父に較べれば稍粗放なたちであつたけれども、

失策

幾分か父の特長たる周到沈着の風があるので、普通の少年よりは失策も少く、その後もこれ程に叱責を加へられたことはなかつた。

(富源の開拓による)

二九 恩を忘れず

福島正則常に物あらく、人を誅する事を好みりと、世の人いひあへり。或時、近習の士少しの過ありければ、城内の櫓に押しこめ、食物を與へずして餓死せしめんとす。こゝに一人の茶道坊主嘗てその士の恩を受けたることありしが、今この有様をいたみ、夜潛かに

携へ行く
ふるまひ
あらはれ

行はる

報い

弱げ

おはして

衰へ。

焼飯を携へ行き、て與へたり。かの士、汝が只今のふるまひあらはれなば、われよりも罪重からん。われは飯を食ひたりとて、命助かるべきにあらざれば、とく歸れ。といふ。茶道更に「同じ罪に行はるとも後悔せじ、恩を受けて報いざるは人にあらず。こなたも亦弱げなる心おはして、わが志を空しくし給ふは、口惜しき事なり。」といへば、士悦んで、さらばとて、これを食す。夜毎にかくの如くしたり。

程經てもはや死したるならんとて、正則櫓に行き見しに、士の顔色少しも衰へず。正則さては飯を贈りた

某

おのれ

立て直す
騒がず

ながらへ。

る者あるべし。と怒りしに、茶道さし出でて、某贈れり。と申す。正則はたと睨みて、おのれ何故にかくしたるか。頭二つに切り割らん。と膝立て直せば、茶道は騒が



福 島 正 則

ず、われ前に罪を得て、既に水責にあひて殺さるべかりしに、かの人
の申しひらきにて、今日までも命ながらへて候ふ。

候ふ。

思ひ慕ひて

その恩を報いん爲に、毎夜忍びて飯を運び候ふなり。といふ。正則怒れる眼に涙を流し、汝が志感ずるに餘あり、人は誰もかくこそあるべけれ。士をも免すべし。とて、近習の罪を宥め、深く茶道を賞しけり。正則を暴悪の人と世に稱しけれど、士の思ひ慕ひて力を竭し、身を棄てて奉公しけるも、かくの如く義に感ずる事の切なる人なる故なるべし。

(湯淺常山)

三〇 酒井金三郎

天正十八年、豊臣秀吉小田原の北條氏を滅して、その

天正十八年は二二五〇年

支配

普請

草履

同僚

舊領を徳川家康に與へたりき。されば家康は江戸を居城として、關東八州を支配し、つとめて才能の士を招きしかば、北條氏に従ひし浪人の、出で仕ふるものも少からざりし中に、原吉丸、酒井金三郎といふ若者ありき。後に伏見の城を普請せし時、一日家康巡視の爲に庭に出でたり。吉丸その佩刀を捧ぐる役に當りしが、急の事とて草履も見當らず、素足のまゝにて、うしろにつき従ふ。炎天の折なれば、土も砂も火の如くやけたるに、吉丸が敷石の上につくばひ居るを、金三郎見かねて、草履を持ち行きてはかしまむ。同僚の士こ

恥

爪はじき

れを見て、いかに親しき友なればとて、衆人の前にて、傍輩に草履をなほしてはかすることあるべきか、恥知らぬ男よ。」と口々にいひ立てて、爪はじきすれば、目付衆も捨て置きがたくて、この由家康に聞え上ぐ。家康もかねて知り居たれば、金三郎を召して、その行を糺し問ひしに、金三郎申すやう、只今はわれら兩人とも傍輩として同じく君に仕へ奉れども、昔を尋ねれば吉丸は某が主筋にて候ふ。その舊主が跣にてたずむ様を見るに忍びず、前後も覺えず草履を進めしまでの事にて、外に申し上ぐべき子細も候はず。」と

尋ぬ

主筋

たずむ

初

蚯蚓

景物

答ふ。家康大いに感心し、若年ながら本を忘れぬ心がけ、神妙なり、末頼もしき侍かな。」とて、その祿を加増したりき。これより武士の風漸く改り、立身出世したるものも、初を顧みて驕り高ぶらず、禮儀を正して、人に交れりといふ。

三一 蚯蚓

支那人は蚯蚓を鳴くものとして、歌女といふやさしき名を負はせ、わが國の俳人もこれをうけて、秋の夜のさびしき景物として、蚯蚓の鳴聲を句によめり。さ

れど蚯蚓は鳴くものにあらず、その鳴くといふは實は螻の聲なりといふ。

蚯蚓が地上の土を食ひつくしたらん後には、何を食ひて生くべきかとして泣き悲しみきといふ昔話は、天の落つるを憂へし杞人の取越苦勞と好一對の笑話なり。さればこのもの魚釣の餌となるより何の能もなく、力なき蛙、骨なき蚯蚓と古き歌にも嘲られしが、チャールズダーウキン氏によりて、意外の功勞あることを世に紹介せられたり。このもの常に地中に在りて土を食し、その土の腸を通過する間に、その中にまじ

取越苦勞

ダーウキンは第十九世紀の大學者にして、進化論を證明せる英國人なり

腸

絶えず

りたる僅ばかりの滋養分を吸収して、生活するが故に、下層の土を上層に送り出し、絶えず土地を耕せるに等しき働をなすなり。

事實

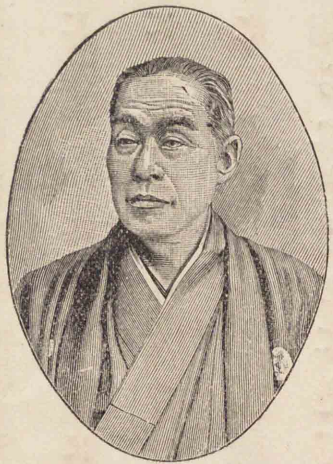
この事實はかの博識なる博物學者によつて始めて知られしものにして、氏の計算によれば、庭園には千坪の地中に平均四萬五千匹の蚯蚓あり、畠にはその半數あり。この多數の小動物が地面に送り出す土は、平均十年に一寸六分、六十年に一尺に及ぶといふ。即ち地球面の各處に於て、その地を六十年間に一尺づつ耕す割合なり。その功豈大ならずや。

豈

三二 少壯時代の二傑 その一

福澤翁

福澤翁名は諭吉
天保五年は二四
九四年



福澤翁

翁は豊前國中津藩の士福澤百助の子にして、天保五年、大阪に生れたり。翁が三歳の時、父は大阪にて死せしかば、それより母に従ひて藩に歸れり。家元より富めるにあらず、母は一人して兄弟五人の子供を育てれば、十分なる教育は思ひ

もよらず。藩の習として、士族の子は大抵大學、論語などを學びたれども、翁は、これを勸むる人なかりしため、やゝ久しく讀書の味を知らざりき。然るに十四五歳に至りて、己の知れる人々は皆書を讀めるに、己一人何も學ばぬは恥づべきことなりと思ひて、田舎の塾に通ひたり。

通讀
門閥

四五年の間、翁は専ら漢籍を學び、普通に人の讀むべき書は大概讀み盡したり。殊に左傳は最も好める書にて、凡そ十一度も繰返して通讀したりといふ。然るに當時士族間には門閥の制やかましく、公私ともに

嚴重

上下の區別嚴重にして、下士族が上士族に對するに
は、言語まで異にせざるを得ず。學問も武藝も如何に
まさるとも、家柄の人には勝つこと能はず。この風は
子供の交にも及びて、上士族の兒はその家柄を笠に
着て、暴横至らざるなきを以て、翁は子供心にも不平
に堪へざりき。これ即ち後に翁が郷里を去りし大原
因なり。

堪へざりき

安政元年は二五
一四年

安政元年、翁二十一歳の時、長崎に遊學せり。その頃、中
津藩の中に横文字を讀むはさておき、これを見たる
人すらなかりき。折しもペルリの日本に來りたる時

喧傳

とて、砲術といふことは田舎にまで喧傳せり。翁の兄
一日翁にいへるやう、西洋の砲術を取調べんには、是
非とも蘭語の書籍を讀まざるべからず。汝これを讀
む志なきか。」と問へば、翁は即座に、「人の讀むものなら
ば、横文字なりとも何なりとも讀むべし。」と答へ、遂に
兄に従ひて長崎に行きたるなり。

食客

長崎に行きて、翁は砲術家山本某の食客となれり。某
は眼を病める人として、翁は常に漢文の書を讀みて聞
かせ、又その家に十七八の獨息子のありしにも漢籍
を教へたり。その家は不相應に大いなる活計をなし

不相應
活計

督促

しかば、借金もありて、翁はその督促の言譯をもし、又は新に借入の申込にも行かざるを得ず。下男 of 病氣の時などには、水を汲み、掃除をし、風呂までも焚きたり。又某の妻は犬猫を愛する人なれば、その世話をもせざるべからず。家中のこと一切翁一人の手にかゝれり。

三三 少壯時代の二傑 その二

福澤翁のつゞき

翁は長崎にて、或は蘭方醫の家に通ひ、或は通詞の家

熟する

に行きて、熱心に蘭語を學び、漸くこれに熟するに至

己

緒方洪庵は蘭方醫にして、幕府の侍醫たり

塾、然

りしが、安政二年、去りて大阪に來れり。その後、一度は己の病により、一度は兄の死去によりて、歸國せし事ありしが、また大阪に出て來り、緒方洪庵の塾に入りて、なほ蘭語の研究に餘念なかりき。當時、緒方塾の風といへば、頗る亂暴なるものなりしが、勉強にかけては、その塾生に及ぶものなく、晝夜を別たず書を読み、倦み疲るれば、机に凭りて眠るのみにして、蒲團の上を臥すことなしといふ様なりき。翁もこれらの學生に伍して、一心不亂に學問に勵みたり。

一心不亂

抱負

横濱開港は安政六年(二五一九)なり

意義

看板

徘徊

思へらく

後に至りて、翁は學びに行くにあらずして、教へに行くなりとの抱負を以て、江戸に出でしかば、藩の子弟は相携へてその門に學べり。ある時、翁は横濱に行きぬ。當時、横濱は新に開港場となりて、外國人も多かりしかば、物珍しさにこれと言を交へしが、意義更に通ぜず、看板の字を見れども讀まれず、一晝夜の間、居留地を徘徊せしかども、これまで辛苦して學びし蘭學の效は少しも見えざりき。翁の落膽一方ならず、思へらく、かの言語は英語か佛語ならん。中にも英語は世界に最も廣く行はると聞く、この後、日本にも大いに

(三)

覺悟
教ふる人

己己

苦學

派遣

構へて

行はるべきは、必ずこの語なるべしと。かくの如く信じ、新に勇氣を振り起して、それより専ら英語を學ばんと、覺悟を定めぬ。されど江戸の中に英語を教ふる人一人もあらず、己むを得ず英蘭對譯辭書により、或は漂流人に就きなど、あらゆる方法を盡し、數年間苦學して、遂によくこれを解するに至れり。その後、翁は木村攝津守に従ひてアメリカに渡り、また外國派遣の使節に従ひてヨーロッパを巡り、更にアメリカに行き、歸朝の後、芝に居を構へて塾生を養ひぬ、慶應義塾これなり。

三四 少壯時代の二傑 その三

伊藤公

予が幼時、吉田松陰の松下村塾に入れる前に、予に讀書を教へたるもの三人あり。その中予の最大の恩師にして、讀書の外に武士の精神をも授けられたるは、來原良藏と稱する人なり。予の始めて來原と相見たるは安政三年丙辰の歲なり。當時毛利家は幕府の命によりて、鎌倉より宮田に至る相州沿岸を警護し、藩士はバラック様の板小屋を作りてこれに起臥せり。予

丙辰 警護

時に年十六、勤番の爲に長州より派遣せられ、同輩三人と共に宮田に赴けり。來原亦宮田に來り、予が萩の久保塾に於て讀書を學びしを聞き、且予に多少見るべき所ありと思ひしにや、



伊熱心深切に讀書を授けた
藤り。彼は文武兩道の達人に
公して、學識深遠、豪膽にして
克己心に富み、殊にその意

深切 豪膽 鞏固 携へて

志の鞏固なるに至りては、他に比すべきもの少し。冬期毎朝午前四時頃、騎馬提灯を携へて、余が小屋に來

教へたり

遭遇

習慣

愚痴
弱音

り、詩經、書經を教へたり。常に「武士は戰場に於て如何なる困難に遭遇せずとも限られぬば、平常より跣足の習慣をつけざるべからず」といひ、祁寒、嚴暑共に草履を穿つことを許さず。寒中思はず「寒し」といへば、直に聞き咎め、寒しといへばとて寒氣の緩むべきか。何事も飽くまで辛抱するこそ武士の道ならぬ。愚痴と弱音とは決して言ひ出すべからず」とて、予を戒めたりき。

然るに予等の勤番は一年交代なれば、予は十七歳の秋、滿期にて歸藩せんとするにあたり、來原は諄々と

（二）

紹介状を裁し

丁巳、己巳

費

學問を繼續すべきことを諭し、自ら吉田松陰に紹介状を裁したり。よりて安政四年丁巳九月萩に歸り、直に贄を松陰に執りて村塾に入り、茲に同門幾多の青年と相知るを得たり。

（藤公餘影）

三五 名判官

訴へ出づ。

二婦あり、一人の兒を互に我が子なりと争ひて、訴へ出づ。所司代板倉重宗いづれが眞の親なるかを知る能はず、二人してその兒を援かしめ、援き得たる者の子と定むべしといふ。二婦乃ちその兒の左右の手を

堪へず

とりてこれを援くに、兒痛に堪へず、泣き出せり。一婦
思はず手を放ちて、痛める色あり。一婦援き得て喜ぶ
こと甚だしく、將にその兒を抱き去らんとす。重宗聲
を厲しくして曰く、かれ力足らざるにあらず、兒を傷
はんことを恐れて、強く援かざるなり。汝は則ちこれ
に反す、汝必ずこの兒の母にあらじ。と言はれしが、果
して然りき。

五條の邊にて、金三步を拾ひたる者あり。この者天性
正直にて、様々に落しし者を尋ねれども、更に知れざ
りければ、奉行所に出でてこれを捧げたり。重宗高札

始末

訴訟

を建ててその主を捜させければ、即日來りて訴ふる
者あり。これにより双方の始末を聞き糺し、落しし者
に金子を渡しければ、この者固辭して、わが落ししは
過失なり。右の金子なくとも困窮にも至らず。天より
かれに與へたるものなれば、かれに渡し給はれ。とい
ふ。拾ひたる者は、われたとひ貧窮すとも、身を勞せず
功もなきに、いかでかこれを受くべき。われは不潔の
ものを以て妻子を養はずと、互に譲りて事決せず。重
宗これを聞きて感涙を流し、余當所に在ること十年、
日々利慾の訴訟は聽けども、未だかゝる正直のもの

拜謝

に接せしことなし。余も汝らの仲間に入りて三步出金すべし。これを合せて兩人に三步づつ分つべし。以來は余も汝らの友となりて相親しむべし。」と言はれたれば、二人拜謝して退けりといふ。

(名將言行錄)

三六 曉星園

事務

本郷定次郎は越前の人なり。その家代々造酒を業とす。されど定次郎は家業を好まず。これを棄てて一屬吏となりしが、官に仕ふるもまたその好む所にあらず。日々登廳して事務を執れども、心常に安ならず。一

(巻二)

謂へらく

經營

わづか

徒食

私語

夜忽然として感ずる所あり、某慈惠院に入りて力を盡さんと欲し、明くるを待ちて尋ね行きたるが、院内の様子を見て大いに失望し、發憤して謂へらく、わが志を成すはたゞ獨立の經營によるべきのみと。乃ち孤兒數人を得、己の子としてその下宿に養ふ。

されどわづかの俸給は數人を養ふに足らず、かつ徒食は遊惰の習を増すべしと思ひて、孤兒に命じて靴みがきの業に就かしむ。ある夜寢に就きて後、その私語するを聞くに、父は官吏なるに、子は靴みがきなるか。といふものあり。定次郎深くこれに感じ、衾を蹴て

起つて曰く、父は好んで汝等ばかりを靴みがきとせ
 んや、たゞ生活の道を得んが爲に、まげて官吏となれ
 るなり。今にして思へば、眞に誤れり。いでや刷子を取
 つて共に街に立たん。汝等も労働に力めて、自ら養は
 ざるべからず。能くこれを覺悟せよ。とて、翌朝直に官
 を辭したり。

官を棄てて孤兒と共に居れば、貧窮いよく、甚だし
 く、下宿よりは退去を請はれて、居るに家なく、辛苦に
 辛苦を重ねしが、やうやく一紳士の好意によりて、下
 野那須野の地を借り、こゝに曉星園を開きて孤兒四

好意

三

補助

想像

十餘名を養ふに至れり。されど固より己に餘財ある
 にあらず、富豪の補助あるにもあらず、心身の苦は想
 像の外にありて、遂に肺を患ふ。

倒れ 絶え。

ある夏、病を養はんが爲に鎌倉にあり。時まさに赤痢
 の流行に際す。偶、海岸を散歩し、乞食の婦人が嬰兒を
 抱いて、路傍に倒れたるを見る。母は赤痢に罹りて既
 に息絶えたるに、兒はそれとも知らずして、乳房にす
 がり、吸ひては泣き、泣きては吸ふなり。見るに涙は止
 らず、定次郎はわが羽織を脱ぎて嬰兒に着せ、その身
 の病も忘れて、伴ひて園に歸れり。

演説

東北地方の有志招いて、その事業の始末を公衆に語らしむ。初はこれを疑ひ、またこれを嫉みて、その演説を妨ぐるもの少からず。定次郎三たび血を吐き、三たび語を續ぐ、語々肺腑より迸り、衆みな聲を吞んで泣く。かくして立ちどころに數十人の贊助者を得たりといふ。

贊助

肺腑より迸り

祈禱

東京の醫某用事ありて園の傍を過ぐ。一兒の樹下に跪きて祈禱するを見、近づきて窺ふに、「神よ、一頭の馬を賜ひ、吾をして薪を着けて町に賣り、父上の薬を求めさせたまへ。」といふなり。某痛く感じて、歸京の後直

齡

行

に馬を贈れりといふ。嗚呼天この篤志の人に齡を假さず、明治三十二年、定次郎病死し、その血と涙とに成りし曉星園も亦倒れぬ。されど業は亡ぶれども志は朽ちず、至誠の行は永く人心に銘して忘れられざるべし。

補訂新體國語教本卷一終

明治四十一年九月廿日印
 明治四十一年三月十日訂正再版印刷
 明治四十一年七月五日訂正再版發行
 明治四十四年七月廿日修正三版印刷
 明治四十四年七月廿日修正三版發行
 明治四十五年二月八日訂正四版印刷
 明治四十五年二月十一日訂正四版發行

補訂新體國語教本

每卷定價金貳拾六錢



著者	故藤岡作太郎
補訂者	藤井乙男
發行者	西野虎吉
印刷者	水谷景長
發行所	開成館
西部販賣所	大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角
東部販賣所	東京市日本橋區數寄屋町九番地

東京市小石川區小日向水道町七十三番地
 東京市小石川區久堅町百〇八番地
 東京市小石川區小日向水道町七十三番地
 【開成館】東京第五區藏書
 東京市東區心齋橋通北久寶寺町角
 三木佐助
 林平次郎

